

MACF 礼拝説教要旨

2023 年 1 月 8 日

「人生における「悔い改め」は必須」

ルカによる福音書 13 章

1 ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。

2 イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。

3 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。

4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。

5 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

* * * * *

1) 罪深い人だから？

ここにはふたつの悲劇的な災難が取り上げられています。

ひとつは総督ピラトがガリラヤ人を殺し、その血をかれらのいけにえに混ぜたという出来事。これはガリラヤ人への冒涇であり、彼らにとっては耐えられないような侮辱的行為だったと思います。彼らの宗教行事がめちやくちやにされたからです。全く理不尽な仕打ちであり、とんでもない出来事だったと思います。

もうひとつはシロアムの塔が倒れてその下敷きになって 18 人が死亡したという事故についてです。これも悲劇的な出来事でした。

そして、ある人たちは、そういう出来事を耳にした時、そんなことが起こったのはきっとガリラヤの人たちが罪深い生活をしたことへの結果だと感じ、また塔の倒壊でいのちを落とした人たちも、同様に何か罪深い生き方をしていたに違いないと考えたのです。

私たちの中にはそういう発想はありますよね。「あんな悪い人はきっと、ろくな死に方はしない」とか「あんな死に方をしたんだから、よほど悪いことをしたに違いない」とか……。

でも、そうなのでしょうか。

実は、私たちが悪人でも善人でも、事故に遭うことはあり、悲劇に巻き込まれたり理不尽なことで悩まされたりすることはあるようです。

すると、わたしたちは、「クリスチャンなのになんで、あんなことがあの人に起こるのだろう」と尋ねたくなるわけです。

どこかに、クリスチャンになったら、他の人が悲劇に直面することがあっても、私たちはそういう目に遭わないというような発想がそだっていないのでしょうか。

2) あなたはあの人より聖いのか？

はっきりいうと、ちょっとがっかりする方もおられるかもしれませんが、クリスチャンであろうが、なかろうが、誰でも理不尽な経験をすることがあり、事故や悲劇に巻き込まれることもあり、つらい死に方をすることがあるのです。

事故や悲劇に遭うことは、誰にでももたらされる可能性があるのです。

クリスチャンなのに、どうして？と問いたくなる気持ちは理解できますが、残念ながら、クリスチャンだからといって、特別に災害から守られる可能性はそれほどありません。命が人より延びるといってもそれほど期待できません。

では、クリスチャンとしての「利益」というか「祝福」とは何なのでしょう。

何か有益なことはあるのでしょうか。

3) 悔い改めなければ

イエスさまが語られた次の言葉はとても重要です。3節にも5節にもある言葉です。「決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

誰にでも悲劇が起こる可能性があり、事故に出会う可能性がある中で「自分はある人より聖いから、決してそういう目には遭わない」とか「自分はクリスチャンだから大丈夫」などとは言えないとイエスさまは教えます。

そして「悔い改めなければ滅びる」と断言しています。

これは、よく考えると、悔い改め流ことができれば、どんなことが起こっても

「希望につながる何かを心に持てる」という意味にもなります。

人生における「悔い改め」は必須事項なのです。

それがなければ「虚無と絶望感」の中に閉じ込められてしまうことになるからです。

悔い改めとは「発想の方向転換」「態度の方向転換」「見方の方向転換」を意味しています。

「神様の愛を視野に入れた見方に方向転換すること」「神の約束を視野に入れた考え方や感じ方の方向転換」ができると、たとえば悲劇に遭うことがあるとしても、どこかに「悲劇だけでは終わらない方向」に自分の心を向けることができるのです。

イエスさまが語った二つの事件に関して言えば「あれは特別に悪いことをした罰としてもたらされたものではなく、誰にでも起こり得る事柄だ」と自覚し「だからこそ、神様としっかり繋がり、絶望せずに生きられるように神様からの励ましや慰めをしっかり受け止めながら1日、1日を丁寧に生きること」の必要に気づくこと、こそが「悔い改め」ということと結びついてくるのです。

そういう方向への「気づき」がないと、絶望することしか道がなくなってしまうのです。つまり、人生における「嘆き」の時は誰にでもあるということなのです。そして、その嘆きの時に、どこに目を向けるか、何を気づきの土台にするか、それによって絶望か希望か分かれ道があるのです。

神などいない、神など不要だ、自分は神のような存在だと心に決めて生きていたら、悲劇に直面した時、本当に難しい状況に追い込まれるでしょう。

「私は弱く、神の助けがあるからこそ、1日生きられる」と考え、神様の言葉を心に留め、神様からの慰めや励ましを求めつつ生きていたら、悲劇に直面したとき、どこに逃げ場があるかわかるので、心の中にわずかな希望を保つことができる可能性が存在します。

悔い改めるとは、悲劇そのものに目を向けるだけでなく、神の約束に気づくこと、神の臨在に気づくこと、自分のいのちは、神様の助けの中で保たれていることに気づくこと、そして神様に心に向けることを意味しています。

日々、悔い改めが求められています。

悔い改めとは、必ずしも「罪から離れる」という意味だけでなく、「心の方向転換」を意味しています。神様のほうにしっかり向きを変えて、神様と向き合って生きることを決断するのです。

そこに、希望に向かう小道が開かれます。
それは狭い門かもしれません。
それは辛い決断かもしれません。
でも、神様と向き合って生きるという方向転換こそ希望につながる出発点です。
ヨブは最終的にそこに気づきました。

私たちにもそれが求められているのです。
祝福がそこから、希望と、生きる意欲がそこから生まれます。

.

* * *

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/W6JeAjLn3CQ>